



初年次ゼミナール覚え書き 2年目の試行

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005865

初年次ゼミナール覚え書き 2年目の試行

堀江珠喜

昨年度、初年次ゼミナールの当番を割り当てられ不承不承に引き受けたのだが、実際に担当してみるとなかなか愉快的な授業となった。それについては既に昨年度末、本誌に発表した通りである。これで私に課された初年次ゼミナールの義務は終わったのだが、せっかくの経験を活かして再度この科目を担当すべきと考えた。教師が面白い授業では、学生もまた楽しんでいるはずというのが私の持論である。(担当者がつまらないと思いつつ進める授業は、学生にとっても苦痛に違いない。) ならば学生が喜んで学ぶ授業を提供できる者がすればよい。特に初年次ゼミナールのように専門性を問わず、学生の学力差もかなりあり、大学での勉強・研究の仕方(かつ将来、社会に出て役立つノウハウ)を学ばせるという科目では、研究者として優秀な教員が必ずしも適任ではない。どんな学生が来ても慌てず騒がず対処できる柔軟性と幅広い知識・経験が求められるのだ。

というわけで今年度は自ら志願して初年次ゼミナールを担当することになった。テーマは昨年度と同じ「将来のエリートを目指す者には何が必要か?——を考える」である。昨年度と同様、この目新しい全学必修科目についての報告をかねてその意義を考えたい。

今年度第一回めの初年次ゼミナールも昨年と同じく各自の自己紹介と図書館ツアーとした。(後日、このツアーがとても役立った旨、一人の男子学生が述べた。) 今年度は現代システムの学生が10名、工学域が3名、地域保健が2名で女子4名、男子11名だった。学域の割合も男女比も昨年度とずいぶん違うためか、初日から雰囲気も異なっている。一口で言えば、今年度は昨年に比べ「おとなしい」のだ。日本では「おとなしく良い子」のイメージがあるが、欧米では「おとなしい」のは単に積極性に欠ける、さらには発言・発表能力がないとみなされる。私も神戸女学院で12年間、極めてアメリカ的価値観による教育を受けたので、知識欲旺盛で元気な学生を高く評価するきらいがある。

自己紹介で、このゼミナールを選んだ理由について工学域の女子は、入学前に私の講演を聴いたときに決めたと言い、現シスのある男子はやはり私の講演を聴いた保護者に勧められたとのことであった。ここ数年、3月に本大学生協は入学予定者に対し、組織の宣伝を主目的に大学生活についてオリエンテーションを開いている。当然ながら大学生活では勉強が主目的のはずなので、私が大学での「学び方」について30分話してきた。毎年前期入試合格者向けと中期入試合格者向けで計2回行ったが、2013年はこれにそれぞれの保護者だけを対象とした講演も2回引き受けたのである。教員の多い本学で私が講師に選んでいただけるのは光栄だし、私が教える学生のほとんどは一年生なので事前にお互いをさりげなく観察できるのも良い機会だと思われる。そしてはからずも初年次ゼミナールの志望先を考える参考ともなったわけである。もしかしたら同様に私を希望しながら抽選で外れた学生もゼロではないかもしれない。また大学生にもなって「保護者に勧められて」というのもいかなものかとは感じるが、それだけ家庭内でコミュニケーションが保たれているのは結構なことである。

一人の男子学生は「ちょうどこの時間帯が空いていたので、この時間だったらどのゼミでもよかった」とまったく可愛げの無い説明をした。それが事実であっても大人の世界ではwhite lieが礼儀だと機会を見計らって教えるつもりではあったが、この学生だけはゼミの途中で居眠りをすることが多く、終了すると脱兎のごとく姿を消すので雑談もできない。また人一倍プライドが高く(ということはコンプレックスも相当強いので)、アドバイス

は大変難しい。クラス分けにおいては本人のそのゼミナールへの熱意が尊重されるべきだが、現状はコンピュータで機械的に処理されてしまうようだ。どこのゼミナールでも構わないと思っているような学生に來られると迷惑である。ちゃんと私のシラバスには「将来、エリートになりたいと思わない者は、受講を遠慮していただきたい」と明記してあるのだから。

図書館ツアーでの移動の仕方が昨年度に比べ、やや速かったのは女子が少なかったためだろうか。不思議なことに、若いうちから女子のなかには（健常者でありながら）腹立たしいほど敏速さに欠ける歩行を常とする者がいる。俗にいうところの「おばちゃん歩き」である。そこで昨年は授業で歩き方を教えたが、今年は必要性をあまり感じなかった。ただ図書館ツアー中、美形女子2名を男子数名が取り巻くには閉口した。下手に注意するとセクハラになりかねないので、こちらは見て見ぬふりである。（7月ころにはカップル誕生か？とおぼしき言動も伺えたが、いずれにしろ学生生活がより楽しいものとなるのは悪いことではない。また意中の相手の前では良い印象を与えるべく、予習にもより気合いが入るはずだから。）一人、頼もしかったのは将来の目標を父親と同じ税理士としている現シスの男子学生だ。初めからその方向を聴いていると、私も折につけ経済・経営に関するトピックスを彼に振り、『エンロン』などの社会経済問題映画のDVDを貸して発表させたりすることになる。（ちなみに7月には彼の目標は会計士となった。その向上心は嬉しい。）

第二週めは、宿題「エリートを目指す者には何が必要か、10項目を考えてくる」を課した。そして大事なものは、その「理由」である。私の授業は（英語科目であっても）理由を重要視する。これも神戸女学院流である。単に知識の教育ではなく、論理性と分析力を身につけなければ解決（How）の糸口は見つからない。最近の若者はSNS使用においては堪能だが、「いいね！」をクリックするだけでは、ますますWhyとHowの視点に欠ける。いや、若者ばかりではない。残念ながら本学の幹部にもそのような思考の浅い方がいらっしやる。Howを考えたいのだが、その前にWhyを考えないし、ひどいときにはWhatも把握されないので、妙案が浮かばないのは当然なのだ。調子のいいイエスマンばかりに取り囲まれていないで改革の前に現状をしっかりと見て、現場の声を聴いていただきたいものである。

さて、これも昨年通り配布した白紙に10項目を書かせ、そのうち特に必要と思うものを3項目選んでそれについて理由を発表させた。内容について特筆すべきことはないが、人前で話すことに慣れていないのは明らかであった。昨年は自然体でディスカッションが始まったのだが、今年はその気配がない。私が何度も当て、翌週もこのテーマで、さらに考えさせることにした。ともかく「考える」と「発表する」ことに慣れさせることが、とりあえず彼らに必要と判断したのである。

第三週めは、前週での皆の意見を聞いてこの3項目を再考させ、再度発表させることによって「エリート」のイメージをより固めた。そして第四週からは司会者とそのアシスタント役を学生に順番に務めさせることにした。（最近の就職試験でディスカッションさせる企業が増えているが、そこで雇用者が求めるのはリーダーではなくサブリーダーと聞く。つまり、いざとなればリーダーシップを発揮する能力があり、また周りへの配慮もできるのがサブリーダーなのである。）ところが、今まで自分たちで仕切るような発表会・討論会の経験がないようで、皆に発言を促すことができず、自分がコメントして次の学生に発表させるという奇妙な状況となった。「司会者は自分でしゃべらず、人にしゃべらせるのが役目」と注意すると「どうしたらいいんですか？」と助けを求める。昨年度は自然発生的に議論が進んだが、今年度は自分から発言しようとする者がいない。本当は意見を持つ

ていても、誰かが口火を切るのを待っているのかもしれない。あるいは言葉に表すのが苦手なのだろう。いや、これまで受験用の知識を詰め込んで来ただけで、自分の意見というものがないとも考えられる。「誰もしゃべらないなら、司会者が当てて尋ねる」とアドバイスしたが、司会者はいつも遠慮がちで、どうしても自分のコメントによって処理してしまうのだ。

第四週めは、それぞれ自分が注目し人に勧めたい映画やテレビドラマを一つ選び、紹介させた。前週からそのプレゼンテーションを工夫するように指示したので、当日はサウンドトラック音楽を流しながら戦闘シーンを説明したり、映画のスティールをプリントアウトして紹介するなど独自のアピール・スタイルが発揮された。昨年度には皆無だったが、今年度は巧くスマートフォンを用いる学生が半数いたことに驚かされた。ただし現代においてもアナログスタイルでのプレゼンテーションが求められる場合があるので、各自の口頭発表能力が必要であり続ける旨は指導した。またこの週は各自に批評の機会を与えたいと思い、「誰の発表が最もよかったか？ その理由とさらによくするにはどうしたらいいのか？」との課題を念頭に置きながら、プレゼンテーションを聴かせた。さらに第五週めの授業のために「皆の発表を聴いて、最も観たいと思った映画・ドラマはどれか？ その作品について調べ、できれば観る」という宿題を出した。また前週に各々が「エリートにとって必要な3項目」について、どんな努力をしているのかについても考えさせた。この頃から、好みや将来の方向性がうかがえた学生には私が所有するDVDを貸し、翌週の授業の冒頭でその作品について発表させた。それでその作品に興味を抱いた学生には翌週まで貸し、できるだけ欧米文化や経済問題に触れさせる機会を作った。DVDは前述の『エンロン』、『キャピタリズム』、『華氏911』、『不都合な真実』、『ビューティフル・マインド』、『キューティ・ブロンド』、『プラダを着た悪魔』、『カルメン』、『レッスン』である。

第六週めは、第四週めに韓流映画・ドラマを取り上げた学生がいなかったので、「韓流ドラマ(映画)はなぜ人気があるのか？」について、現状を調べ、また実際に作品を観たり、ファンから意見を集めるなどして発表させた。身近なところでは母親が韓流好きなので感想を尋ねた学生もいたし、もっと経営的な理由を調べて来た者もいた。このテーマとこのときの授業については『青淵』2013年9月号の拙文「韓流人気の理由」で詳しく述べたが、この授業で強調したのは、資本主義社会においては何事も経済絡み、つまり「金」の問題に関わらざるを得ないという視点である。日本における韓流ブームなどまさに経済的事件なのだ。

第七週めは、これから皆で話し合いたいテーマを考えて来させ、その中から選ぶことにした。これも討論によって選べたら良いのだが、時間切れで結局は似たようなテーマをまとめるなどして私が仕切ることとなった。とりあえず翌週のテーマを「自分の好きな本または音楽の紹介」とし、その次は私の提案「美術作品もしくは芸術家について調べ発表する」に皆が賛同したので、これをテーマとすることになった。文学や音楽については多少の知識があるようだが、美術とはこれまで疎遠だった学生が多く、彼等は「だからこそ、この機会に調べたり、発表を聴きたい」と興味の幅を広げることに積極的な姿勢を示した。さらに、その次の週には自分が行ってみたい国を英語で発表することになった。この英語については「自分の英語力を誇示するのが目的ではなく、言いたいことを聴き手に理解させることが大事、つまり相手の能力に合わせた語学レベルと工夫を」とアドバイスした。また用意して来た文章を読むよりは、簡単な単語を使ってしゃべるほうを勧めた。そして翌週以降に残りのテーマからあと二週分を選ぶこととした。

第八週めでは本と音楽を選んだのが半数ずつであった。彼等にとっては音楽のほうが日常的と想像するが、抽象的なものはより説明が困難である。もちろんなんらかのデバイス

によって音楽を流すことになるのだが、書物はもともと言葉で表されたものだけにプレゼンテーションでは一般的により扱いやすかったと思われる。音楽について語るとDJトークの素人版になりやすい。ただしフラメンコを習っている学生が、舞踏用スペイン音楽とともにその文化について紹介したのは説得力があった。いっぽうエッセイについての発表を聴いて感じたのは、内容について反論はもとより疑う、あるいは批判するための知識や論理性、分析力などを持ち合わせていないことである。日本社会では疑いの言葉「そうだろうか？」や「そうかなあ？」を口癖のように使いながらその疑惑の根拠を明らかにできない失礼な大人が少なくない。実はマスコミでもそのレベルの「知識人」を登用されることが多い。しかしそれでは国際社会のエリートにはなれまい。議論の根拠は必ず求められるのが欧米流である。なお本については初版年を、音楽については発表年、創作者については誕生・死亡年などに言及すべきこと、さらにその時代と社会背景を知ることによって理解が深まることを教えた。年代については美術製作においてより重要となることを第九週めに彼等実感したはずである。

第九週めには、ほとんどの学生が絵画をプリントアウトして見せながら説明した。「モナ・リザ」ほどに誰でも知っている作品でないかぎり、絵画について語る際、画像を見せるのは常識である。(ちなみに今年の春、阪急百貨店で行われた姜尚中東大教授<注・当時>による美術講演は、その点まるく準備不足でお粗末であった。まともにお辞儀もできず、あれでは教育的に良いお手本にならない。タレント教師として有名になり、もはや教育者であることを忘れていたようだ。)なお授業ではレオナルド・ダ・ヴィンチを省略して呼ぶときはレオナルドであり、ダ・ヴィンチなどと言おうものなら本当のエリートからは軽蔑される旨は前週に注意しておいた。

それでレオナルドは「鬼門」と感じたのかラファエッロを取り上げた学生がいたが、その説明に、おそらくはウィキペディアかそれに類するものの丸写しを読んだので、こう注意した——「新プラトン主義という言葉を使われましたが、その意味はご存知ですか？説明できない言葉をプレゼンテーションで使うのは危険です。使う限りはその意味を理解しておくことです」。もちろん初年次ゼミナールでは知識を教えるはいけないことになっているので、この言葉について必要と思えば各自で調べておくようにと言いつつ渡した。

美術紹介で異色だったのはニューヨークで1980年代にストリート・アートや地下鉄の壁面画で有名になった画家キース・ヘリングの紹介であった。このときには珍しく「地下鉄の壁面に絵を描いてもよいのか？」との質問があった。発表者はそこまで知らないし、そんなことは知識よりも体験の範囲であろうと思い、私が答えた——「1980年代のニューヨークは、現在ほど安全ではなかったもので、地下鉄の壁面にまで警察もニューヨーク市も気を配っていらなかったという実情があります。なにしろマフィアの経営する会員制のディスコが流行のスポットで警官も仕事帰りに遊びに行ったのですが、そんなところではマリファナ、コカイン、LSDも販売されていました。貴方が見せてくれた絵には、そんなドラッグの影響がありますね」。これに対し、発表者は「薬を使っていたから若死にしましたんですね」と納得したようであった。(知識を教えないで学ばせるのは至難の業。教師に幅広い体験が求められる。)

この授業では浮き世絵師を紹介しながら、「春画」をハルガと読んだ男子学生には驚かされた。小さな声で私は「シュンガ」と読み方だけを訂正した。「春画」ってどんな絵かわかっていますか？という質問はセクハラと思われぬように遠慮した。「春の絵です」と答えられたら、あながち否定するわけにもゆくまい。今はインターネットでポルノを楽しむ時代であることを改めて思い知らされた。

第十週めは自分が行きたい国を英語で紹介させた。この回は司会者もアシスタントも、

そして私も英語を使うことにした。もっとも人気があるのはアメリカ合衆国で、次がフランスだったのは私のゼミナールらしい結果である。英語力は高くはないが自分の使える英単語を駆使し、かつオリジナリティとユーモア感覚を発揮して楽しいプレゼンテーションをする学生もいた。つくづくコミュニケーションに必要なのは言葉ばかりでないことを実感した。また発音も正しいほうがいいが、大事なのは中味と、相手に分からせるためのテクニックだと強調した。しかしながら「発音」信者の男子学生1名は改宗しそうになかった。

第十一週めは、時代・場所・ジャンルを問わず、尊敬する人、注目するもしくは気になる人物を一人選んで紹介することになった。そのためさまざまな分野、人種の有名人について考える機会を得た。ただ、実際にこれらの人物を直接は知らないわけで、文献やネット情報を鵜呑みにするきらいがあり、正確に理解するにはより多くの視点からとらえることが必要である。

ちょうどヒットラーを中途半端に取り上げた女子学生がいたので、彼が当時のドイツ人を熱狂させたことも事実であり、その要因を知っておくべきであること、そのためにさまざまな文献を読む必要性を強調した。(そもそもユダヤ人迫害がナチス以前のヨーロッパで始終行われ、ガス室こそ用いられなかったが迫害のひどかったロシア帝国から多くのユダヤ人が渡米した事実を日本人は知らなさすぎる。いったいミュージカル「屋根の上のバイオリン弾き」で何を学んでいるのか?) 英国にしてもチェンバレン首相は反ソ親独であった。エドワード8世とシンプソン夫人はヒットラーとも良好な関係にあったので、退位しなければ英独関係はまた違っていた可能性もある。さらに時のローマ教皇は反共という立場から、ソ連と戦うヒットラーにむしろ味方した。近年ではナチスの設けた中で好ましい制度について論じた書物も出版されている。「盗人にも三分の理」とは日本の諺だが、何につけ100%善か悪かというのは存在しないのだ。

なおこの授業の冒頭では、一人の学生に尾形光琳の『燕子花図』と『八橋図』を比較しながら説明をさせた。前者は根津美術館、後者はニューヨークのメトロポリタン美術館の所蔵である。屏風絵は平面ではなく立体的に置いて初めてその絵が作者の意図した姿を表すと私は考えるが、残念ながら、そのように展示されることは稀である。作品が傷むという理由からであろうが、それならばコンピュータで作成したシュミレーション画像を示して欲しいものである。

第十二週めは、特に学生たちが自ら選ぶテーマの最後にと希望した「現代日本の問題点」について発言させた。ちょうど参議院選挙が近づき、学生の中には有権者もいたので「政治」、特に「選挙」について、若者の政治離れを取り上げた者が目立った。相変わらず討論になりそうにもないので、質問の仕方を学ばすべく、私が発言者に「選挙権を18歳に引き下げるという案についてはどう思いますか?」と突っ込むことにした。即座に「20歳でいいと思います」という答えが返ってきたので理由を尋ねると、自分としてはまだ十分に政治について分かっていないからというものであった。そこで「貴方はそうかもしれないけれど、制度について考えるときに自分の事情で判断するべきではありません。たとえば貴方が18歳のとき、高校生か予備校生かで、とにかく大学受験を目的に生活していたでしょうが、世の中には中卒で働き納税している人もいます。15歳から社会に出て所得税や住民税を納めながら20歳まで選挙権がもらえないのをどう思いますか? さらに徴兵制度がもし復活したら18歳で兵役が始まるでしょう。つまり18歳で戦争に行かなければならないかもしれないのに、選挙には20歳まで待たなければならないことをどう思いますか? また18歳に下げたら候補者はこれまで高齢者対象ばかりだったのを、若者にアピールするような公約も掲げてくるかもしれません。そうなったら、若者の政治

離れの問題も少しは解消しませんか？」

私がこれだけ言うと、その勢いに圧倒されたのか、教師に反論してはまずいと判断したのか、本当に納得したのか、皆、18歳に引き下げ賛成を口にするようになった。そこで私はさらに意地悪くこう批判した——「私がちょっと論理的に語ると、すぐに同調するのも危険ですよ。相手の意見を聴くことも大事だけれど、自分の信念を持っていないとすぐに騙されます。世の中、高齢者相手の詐欺が多いけれど、それは老人が資産を持っているからで、本当は高齢者よりも若者のほうがターゲットとしてははるかに騙しやすいのです。皆さんに詐欺師がやって来ないのは、皆さんにお金がなくて仕事にならないからです。でも、若者が口車に乗りやすい好例は、ナチスのヒットラー・ユーゲント、毛沢東の紅衛兵、ポルポトのクメール・ルージュ少年兵などで、皆、若者が簡単に洗脳されています。老人は人生でさまざまなことを体験し学習している分、青少年よりも騙されにくいのです。自分の意見を持つこと、それにはその持論をサポートする知識が必要になります。それがないと、他人の調子の良い意見に惑わされます。」(本当は白虎隊もこの中に入れたかったが、感情的に反発が生じるのを懸念してやめた。しかし法律的には戊辰戦争は反政府テロだし15~17歳の少年は周囲の大人の価値観に影響され反政府活動に参加したのだ。)

さらに「若者を選挙に行かせるには、プレゼントを用意したら？」という正直すぎる意見には、私も目眩を覚えながら、「選挙権」の歴史について語らざるを得なかった。プレゼント目的でしか投票に来ないような者は選挙に参加する必要はあるまい。選挙権自体が20歳になったらもらえるいわばプレゼントだと言い切った私に反論はなかった。

第十三週めは、昨年度と同様に工学部綿野教授の研究室から院生を2紹介していただき、TAとしてパワーポイントの有効な使い方を学生に教えてもらうとともに、先輩として後輩の相談相手になっていただいた。教師よりも4年上の先輩のほうが、しゃべりやすいこともあるだろう。だが優秀な先輩のほうが、時として教師よりも厳しかった様子が、院生からの報告でわかった。学生が「レポートが書けないんですけど、どうしたらいいですか？」と甘えると、「では大学を辞めなさい」と答えたのだとか。綿野研究室では毎年3度、夏、冬、春に卒論・修論レベルの報告書が課されており、そのような研究生生活を送っているTAにしてみれば、一年生の子供っぽい態度が情けなかったに違いない。

また「就職のコネを持っている先生のゼミに入りたいんですけど、どの先生がいいですか？」には「何を勉強したいのが先でしょう？ どの先生がいいかは自分で調べなさい」、「堀江珠喜先生ってどんな先生ですか？」には「ウィキペディアを始め、この大学教員の中では最もネットで調べやすい先生です。それでもまだチェックしていないのですか？」と呆れながらアドバイスしてくれたそうだ。院生たちは今の大学一年生の子供っぽさに呆れていたのが学域や専攻によって差がある旨、一応説明はしておいた。さすがに一部上場企業の就職先に困らない綿野研究室の院生たちのレベルは高い。後輩として刺激を受けたはずである。

第十四週めは、拙著『いい加減な人ほど英語ができる』を読んでもっとも印象に残った箇所についての報告であった。これも昨年度と同じテーマで彼等の意見も昨年度と大差なかったが、異なったのは授業が終了すると、数名の学生が拙著にサインを求めたことだ。ツーショットでの写真も希望者と撮ることになった。それだけ彼等にとっては思い出に残りたいゼミナールになったものと推測できる。でなければ、わざわざサインペンを用意したり、次の授業の出席を学生カードで記録してから、またゼミの教室に戻ってくるはずがない。

第十五週めは、前期試験期間中なので、私に個人的に相談のある者が研究室を訪ねるようになった。予想通り現れたのは若干名であったが、目の前の試験のほうが大事なのは当然

である。昨年度は実際のエリートの話をお聴かせするべく、公開講座にもなっている関西経済論 XIX に一度出席させたが、私が期待したほどには得るところがないようであったのと、今年度は特に学生が関心を抱きそうな講師が日程表に見当たらなかったため聴講させなかった。

第十六週目は試験で、あらかじめ「このゼミナールで自分が学んだことについて」という題を与えておいた。持ち込みは音の出ない、他の学生の迷惑にならないものなら何でも可である。つまり辞書を持ち込んでも良いので、「しかるべき文章」と「漢字」を用いるように伝えた。(入社試験でひらがなばかりが並ぶ小論文では印象が悪いに決まっている。) 今回のゼミナールでは、テーマについてしっかり調べ準備、プレゼンテーションさせるだけで精一杯で、レポートを書かせるまで至らなかった。まず考え方を修得させなければ、いい加減なレポートをいくら書かせても日本語の練習以上の意味は無い。(もちろん日本語の練習は重要だが、ゼミで「綴り方教室」をするつもりはない。)

そこで試験を、彼等にレポートを書かせる代わりに好機としたのである。レポートなら適当に検索してコピー&ペーストも可能だが、手書きならそうもゆかない。90分という時間制限と各人1枚というスペースの制約もある。持ち込み自由なので、予め書いてきた内容を写しても構わない。それだけちゃんと準備してきたことを私は評価する。極端に言えば(もちろん学生には言っていないが)第三者に下書きを作成してもらってもいい。ただし、そのためにはゴーストライターに自分の体験や主張を伝える能力、そして自分より優秀な書き手を見つける人脈が必要とされる。それらを備えているなら、別にかまわない。たとえ他人の作文でも、まともな文章を書き写す作業で文体を学ぶこともある。日本経済新聞の「私の履歴書」だって、そのエリート本人が書いているわけではない。(日経の記者曰く、本人が書くとはつまらなくて読むに耐えないのだそうだ。)

この筆記試験の狙いは予想以上に有効であった。(第三者の文章は見当たらなかった。) 文体もほとんどが大学生の水準に達している。「皆、異口同音に、プレゼンテーションを何度も行うことによって、「遊び心(雑学)」と「分析力あるいは思考力を裏付けるための知識力(プレゼンテーションにおいては綿密な準備の大切さ)」の大切さを知った旨を記していた。それらは発言者だけではなく質問や反論する立場の聴き手にも必要であり、良好なコミュニケーションのためには大いに求められることにも気付いてくれたようである。学生のなかには、将来(異業種交流団体である)ロータリークラブに入会したときのためにも、雑学力をつける努力をし上手な話し方を身につけたいと書く者がいて微笑ましく感じられた。おそらくは保護者がロータリアンなのであろう。

彼等は、ほぼ大学受験のためだけの高校生活、その前の小学校・中学時代は「ゆとり教育」で学力低下を心配した保護者によって塾に通わされ、結局は「ゆとり」のない年月を送ってきたと考えられる。そして大学に入ると専門の勉強に邁進しなければならないと思っていた矢先に入ったのが私のゼミナールで、雑学力(遊び心)に圧倒されたというわけだ。(私の友人である理系の東大名誉教授は、私がつける香水の名もあてられるし、映画、美術、オペラ、文学、ワインの話題も豊富で社交ダンスもできると最初の授業で言ったことが、結構刺激的であったようだ。しかるに本学では、研究では東大教授に負けないレベルの学者はいても、これだけの雑学を身につける余裕は無い、つまり東大と本学の差は雑学力にあるとの旨、説明したのだ。)

この筆記試験から、彼等が「なぜ」の発想をするようになったことがうかがえた。たとえばプレゼンテーションが巧くゆかなかったのは準備不足のためで、だから自分の意見がなかったり自信が持てず、聴き手に興味を抱いてもらえなかったり説得力に欠けたという旨の反省である。そこから聴き手を魅せるには単なる事実の説明ではなく、その情報を分

析し自分の意見を入れるべきこと、また聴き手を意識し（ときには楽しそうに）相手の目を見て語りかけるように話すことなど、「伝える力」の重要性について書いていた。プレゼンテーションの準備・工夫が楽しくなったとの学生もいた。自分に知識を付けるための自己投資が必要で、とりわけ読書の重要性に気付いたとの意見は、ネット万能であるかのように思い込みがちな現代において、嬉しい成長ぶりであった。しかしなかでも「大阪府立大学という良い大学に来ることができたことを嬉しく思いました」との記述には、これが本心であれリップサービスであれ、ゼミナールを担当した者としてある種の達成感を得ることができた。この言葉が卒業時にも繰り返されることを願っている。